

タコザイル
の再会

通天閣txp

夕方六時、スーパーのレジ袋二つに惣菜や野菜、朝食用のパンなどを詰め込んだ啓一は、車に乗り込み帰路を急いだ。

「しまった…ビールを買い忘れたな」

途中で渋滞する道路を左折し、裏道の小さな路地を通って

マンションの駐車場に赤い軽自動車を止めた。

先に近くのコンビニで缶ビールを買ってから、三階の自宅へと向かった。

「ただいま!!!」

「あっ、パパおかえりー。味噌汁の下ごしらえと炊飯器のセットはやつといたよ」

娘の里英が玄関まで出迎えに来た。

「おーサンキュー。弘はもう帰ってきたのか？」

「ううん。今日サッカーチームは兵庫まで練習試合に行くから、遅くなるって」

啓一が持つレジ袋の一方を受け取り、台所まで運ぶのを手伝いながら返事した。

「そうか。じゃあ先に風呂入ってから、夕飯準備するわ」

～浜田啓一は大阪で暮らす三十四歳の会社員。

といつても仕事は肉の卸売り業で、

飲食店などに工場で加工された肉を配送するドライバー。

毎朝五時半起きで出勤するが、ほぼルート配送なので

午後四時半の定時には上がれるという点でここに就職した。

三つ年上の妻である里穂に、高校一年生になる姉の里英と

中学二年生の弟、弘の四人家族の大黒柱だ～

シャワーを浴び、濡れた髪をバスタオルでさっと拭く。
そして白いTシャツに着替えた啓一は、台所でまな板と包丁を取り出した。
里英が沸かした味噌汁用に大根と油揚げを刻み、
おかげ用の牛肉薄切りとトマト、レタスを手際よく切っていく。
簡単な仕込みを終えると、ボールに冷却用の氷水を用意しながら
沸騰した鍋に牛肉をくぐらせた。
肉に火が通るとボールに移し、その間を使って
ポン酢に合わせる玉ねぎを卸し金で手際よく擂り始めた。
あとはご飯が炊けるのを待つだけと、少し蓋を開けて確認...
「あら？ 里英---!!! ご飯がおかゆになってるやんか。 どないしたんや、これ」
「え、 ご飯も味噌汁も水カップ四じやなかつ？」
「ご飯は二でええんや... しゃあないから雑炊でもしよか」

炊飯器から白ご飯を土鍋に移し、溶き卵・葱や鮭のほぐし身などを
用意して最中に今度は弘が帰ってきた。
「ただいまあ～暑かった～腹減った～」
学校の夏服であるカッターシャツのボタンを外しながら、
冷蔵庫からペットボトルのお茶を出して飲み始めた。
「お、 丁度ええ時に帰って来たな。 試合はどうやってん？」
啓一は雑炊の味見をしながら尋ねた。
「三対二で勝ったで。 僕も後半にシュート決めて一点取ったけどな...」
「ん？ 試合に勝ってゴールも決めたのに元気無いな、 どないした？」
「試合中、 向こうのテニス部らしきラケットを持った
むっちゃ可愛い子が、 相手のフォワードずっと応援しててん」
そして落ち込んだようなため息をついた。
「俺もあんな彼女欲しいなあ」
「お前も最近何か靴箱に手紙入ってた話をしなかったか？
その子とはどうなったんや？」
「あれは同級生がサッカーチームの先輩に憧れてて、
代わりに渡してくれって頼まれただけなんだよ...」
「そうか、 残念やな...。 あ、 雜炊ふやけるから先食べよう」
火を止めて土鍋を台所のテーブルに運んだ。

台所のテーブルで三人は一緒に夕食をとった。
育ち盛りで食欲旺盛な弘が真っ先に食べ終わると
自分の食器を洗って片付けた後、先に部屋へ戻っていった。
缶ビールで晩酌をしていた啓一は、残った里英に話しかけた。
「今日病院どうだった？ママは変わりなかったか」
「うん、元気だよ。そろそろ肌寒くなってくるから、秋用の着替え頼むねって言ってた」
「そっか。じゃあ、日曜日に三人でママんとこ届けに行こうか」
里英は箸を止めて笑顔で頷いた。

食事と洗い物を全て終えると啓一も自室に戻った。
今日の朝刊を読みながら、パソコンの電源を入れてインターネットに繋いだ。
まずは阪神タイガースの試合結果をチェックした後、
SNS（ソーシャルネットワークサービス）の「トモノワ」にログインした。
先ほど聞いた弘の話などをネタにして日記を更新し、訪問者やメッセージリストを開いた。

忙しい啓一はあまり他の会員ページを訪問しない。
その上男性なので向こうから一見が書き込んでくれるのは少ないので、
今日はメッセージリストの最新欄に見知らぬ名前があった。
「おや、ご新規さんは久しぶりだな」
『ビューティ＆チェリー2000』というハンドルネームの女性から
以下のメッセージが届いていた。
【タコザイルさん、はじめまして（^o^）】
写真とプロフ拝見しまして、もしかしたら昔の
お知り合いでは無いかと思いました。よろしければ
私のプロフもご覧になってフレンド登録して下さいね！】

「女性」というだけで啓一の右手に納まったマウスは
三秒を待たずして、送り主のリンク先をクリックしていた。
果たしてどんな女性なのか。少しドキドキしながら、
『ビューティ＆チェリー2000』のプロフィール欄をクリックした。
しかし、顔写真欄は「NO IMAGE」で表示無し。
その他公開してある情報だと、三十四歳、京都在住、趣味は野球観戦、
職業歯科衛生士。あとは休日はインドア派とか自分を動物に例えたら
アヒルとかどうでもいいことが列挙されていた。

最新の日記を二つ、三つ読んだが、近所のファミレスで
ランチバイキング食べ過ぎたとか歯医者で歯石を除去する必要性など
あまりヒントになりそうなものは無かった。
しかし「女性」ということなので、相手のメッセージリストに
とりあえず丁寧な返事を打ち込むことにした。
【ビューティ＆チェリーさんこんばんわ！私もあなたのページを拝見しました。
知り合いかどうかは今のとこ判りませんが、お友達リストに登録しましたので
よろしくお願ひします】
男の性か少し下がった目尻で送信して、この日はパソコンを閉じた。

翌朝、いつも通り仕事へ出勤した啓一は配送トラックを運転しながら昨日の女性について考えていた。

（三十四歳…同じ年で京都在住、趣味は野球観戦で昔の知り合いかも。

Beauty cherry…美しい、桜）

啓一は記憶を遡り自分が知ってるであろう過去の女性を

あれこれ思い浮かべていた。

「あああ！！！もしかして！！！思い出したぞ！！！」

その日の夜、啓一は夕食作りを放棄して三人分のお弁当を買ってきた。

シャワーを浴びてから、台所のテーブルで自分のを食べた後

いそいそと部屋へ戻った。

早速「トモノワ」にログインすると冷蔵庫から持参した缶ビール片手にパソコンのモニター画面を見つめた。

友達登録欄を観ていると『ビューティ&チェリー2000』の表示が

【現在オンライン】になっていた。

そして意を決したように【チャットを申し込む】をクリック。

すると相手もOKの反応を示し、チャット画面に切り替わった。

【こんばんは！】啓一が挨拶をすると

【こんばんは！登録してくれてありがとう】と相手も返してきた。

【あの、一つ聞いていい？ビューティーさん】

【ええ。何？】

【もしかして、京都商業大に居た美桜ちゃん？】

【そうだよ。タコちゃんよく判ったね！】

週末、啓一は大阪梅田のスカイビルで人と待ち合わせをしていた。

中に入ると、エスカレーターで地下一階にあるレトロバーへ向かう。

すると店の前でメニューを眺めている

ブルーのシフォンラッフルワンピースを着た女性を見つけた。

「美桜ちゃん、久しぶり」

すると女性が振り向いた。

「うわあ～！タコちゃん、何年ぶりになるのかな～元気だった？」

「うん、おかげさまで何とか。とりあえず中へ入ろうか？」

外の庭が見える窓際のカウンターに座った二人は、店員にディナーの注文をした。

そして先に運ばれてきた生ビールで再会を祝う乾杯をした。

お互いジョッキーに口をつけると、啓一が先に話を切り出した。

「大学の卒業以来だから、十数年ぶりか。でもよく自分で判ったな」

すると美桜は思い出し笑いをするかのようにくすくす笑い出した。

「それがね、私の歯科医院でたーこちゃんっていう同僚が居るの。」

で、年齢や住んでる場所などで名前検索してたら”タコザイル”って人が

偶然引っかかって。写真観たらピンときたの」

「ははは…確かに最初はタコで登録するつもりだったけど、

既にHN使ってた人がいたんでタコザイルにしたんよ」

～古川美桜は啓一と大学時代の同級生だった。当時啓一が所属していた野球部に一回生からマネージャーとして入部。

卒業する前にはエース投手だった田中と付き合っていた。

一方啓一は学生時代、みんなでカラオケに行くと

いつも好きなエグザイルを振り付け付きで唄うのだが、

動きがタコの踊りみたいなので「タコザイル」というあだ名が付いた～

「美桜ちゃん、田中とはその後どうなったの？」

啓一が突き出しの鳥肝をつまみながら尋ねた。

「卒業後、一年位付き合って別れちゃった。彼のお父さんが病気になって

九州の実家で酒屋継ぐって。私も一緒に来ないかって言われたけど、

こっちで就職したばかりだし、最終的に断ったのが原因」

「そうやったんか…今、結婚は？」

「まだだよ。タコちゃんは？」

「俺は三十の時に今の嫁さんと結婚したよ」

すると美桜も一瞬を置いてそっかと頷いた。

「子供は居てるの？」

「うん、二人。女の子と男の子が一人ずつ」

そう言って携帯に保存した二人の写真を見せた。

「ふーん、でも二人とも随分大きくなかった？結婚したの四年前でしょ？」

「ああ、姉が十六で弟は十四。嫁さんの前の旦那との子供」

「そうなんだ。タコちゃんと奥さんの子供はもう作らないの？」

「嫁は今肝臓の病気で入院してるからね」

「ええっ！ そうだったの…。ごめんね、余計なこと聞いちゃった」

「いや、大丈夫だよ。幸い病状は良くなってきてるし」

啓一はビールを飲み干すと、店員を呼んでおかわりの注文をした。

やがて刺身や椀物、焼きナスやざる豆腐など料理が次々に運ばれてきた。

美桜も芋焼酎の水割りを飲みながら、啓一にぽつりと尋ねた。

「タコちゃんは今、毎日が幸せ？」

「うん。幸せだよ」

「自分と血の繋がった子供が居なくても？」

少し酔いが廻ったのか不羨な質問をしてきた。

「どんな形であれ、仕事が終わって家で帰りを待ってくれる

家族が居るのは幸せなことだよ」

すると美桜は啓一をじっと見つめてつぶやいた。

「そうかあ。タコちゃんは良いお父さんなんだね。

実はね、野球部のマネージャーになった時は最初タコちゃんが気になってたんだ」

「それ本当？」

「うん。でもタコちゃん奥手だし、田中君は熱心に交際申し込んで来たんでそっち選んだの」

「実は俺も最初…というか卒業までずっと」

「えっ？」

「田中が羨ましかった…」

「あら、そうだったんだ」

「あんなおっぱいの大きい彼女ができるなんて…」

「目線はそっちかい！」

美桜は苦笑いしながら、啓一の頭を軽く叩いた。

一時間半後、店を出た二人は駅へ一緒に歩いていった。

カラフルなネオンの明かりと夜風が心地よい中、美桜が足を止めて話しかけた。

「ねえ、タコちゃん。携帯番号とか聞いていい？ またたまに会えるかな」

「うん……実はね、美桜ちゃん。嫁さんが入院したってさっきの話、

あれ本当は俺のせいやねん。結婚して二年目に会社が赤字で閉鎖して、

その後失業状態が長く続いてさ」

「えっ？」

「失業保険も切れて貯えもなくなりそうな時、

代わりに嫁さんがスナックで働くようになって。

元々は酒弱いのに無理して毎日飲んでたから、それが祟って最後は病院担ぎ込まれたんよ」

「そうだったんだ…」

美桜はその後言葉が思い浮かばず、黙り込んだ。

「だから、今度は自分ががんばって働いて、子供達をせめて高校までは

無事に卒業させてやりたいって思ってるねん」

そう言ってにっこりと美桜に笑いかけた。

「タコちゃんはいい奥さんと出会ったんだね。

でもちょっと優柔不断だし、私が幸せ壊すようなこと

になつたら申し訳ないから携帯番号の交換は止めておくね」

「うん、本当はちょっとそういうのしたいって気持ちあるんやけどな」

啓一はじっと美桜の胸元を見つめた。

すると今度はグーでパンチがとんできた。

十分後、自動販売機で切符を買った二人は改札口で別れることにした。

「それじゃ、今日はありがとう。もし野球部のみんなと

一緒に集まる機会があれば、私も呼んでね」

「うん、またな。美桜も早くいい人見つけて身固めなよ」

「あはは、大きなお世話。じゃ、またネットでたまには私の

ページも覗いてね。それともしあつたことあったら何でも言って」

そう言い残して改札を通過した。

「最後のセリフは俺がかっこよく言うつもりやったんやけど…まあいいか」

電車に揺られて三十分後、啓一は駅に着くと商店街のケーキ屋で

お土産にフルーツケーキを買った。

そしていつものように台所の水道で酔い覚ましの水を飲んでいると、里英がやってきた。

「パパ、おかえり。何か今日はいつもよりにこにこしてるね。いいことあった？」

「ああ、ケーキ屋が今日セールしてた上に店員がかわいい子やったからな」

とテーブルの上にあるケーキを指差した。

「あっ！オペラのケーキだ、ありがとうパパ」

里英は嬉しそうに箱を開けた。

そして数秒後…啓一に何か言いたそうな様子で視線を向けた。

「どした、里英。お土産やから弘と二人で食べや」

「パパ…これ中身思いっきり引っくり返ってますけど。

また帰ってくる途中で転んだか何かしたでしょ？」

「そうか…記憶にございません」

ふらふらと台所を出て、トイレで用を足した啓一は

そのまま部屋へ戻ると布団も引かずに雑魚寝してしまった。

翌日、「トモノワ」にログインした二日酔いのタコザイル宛に

ピューティ＆チェリーからお礼のメッセージが届いていた。

「昨日は楽しい時間ありがとうございました。またいつか会いましょうね」

すると画面を観ながらポツリと呟いた。

「また俺が送るつもりだったかっこいいセリフ先に言われてもうた…」

～終～

タコザイルの再会

<http://p.booklog.jp/book/61628>

著者：通天閣txp

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tuutenkakutxp/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61628>

ブクログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61628>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブクログ